

日・米・英・仏・独／教科書で学ぶ「国土とインフラ」

[第7回] アメリカの地理・歴史教科書から学ぶ①

－合衆国史を支える4つの主題 国土／移住／多様性／市民性－

国土学アナリスト 森田 康夫

オバマ大統領のインフラ観・歴史観

2009年1月20日にアメリカ合衆国第44代大統領に就任以来、バラク・オバマ大統領は一貫して積極的なインフラ政策をとり続けています。オバマ大統領は、第1期の就任演説において、「新しい雇用を創造するだけでなく、成長の新しい基盤を築くために我々は行動する。我々は商業の糧となり、我々を結びつける道路や橋、送電網や通信網を造る」とインフラ整備に関する抱負を述べた後、自国の歴史を振り返り、「彼ら(無名の先人達)は私たちのためにわずかな所持品をかばんにしまい、海洋を旅し、新しい生活を探してくれた。彼らは私たちのために工場で汗を流して働き、西部を開拓し、むち打ちに耐え、硬い大地を耕してくれた。彼らは私たちのために(独立戦争の)コンコード、(南北戦争の)ゲティスバーグ、(第二次大戦の)ノルマンディー、(ベトナム戦争の)ケサンのようなところで戦い、命を落とした。これらの男女は私たちがよりよい暮らしを送れるよう何度も何度も苦闘し、犠牲を払い、手が腫れるまで働いてくれた。彼らの目に映る米国は、1人ひとりの大望の集積もさらに大きいものだった。生まれや富や党派の違いを超越した国だった。これが今日も我々が続けている旅だ。我々は依然として地球上で最も繁栄し、強い国家だ」と語りました。

また、「アメリカよ。共通の危機に直面した今、この困難な冬に、我々はこの時を超えた言葉を思い出そうではないか。希望と美德によって、氷のように冷たい流れにもう一度勇敢に立ち向かい、いかなる嵐が訪れようと耐えようではないか。子々孫々が今を振り返った時に、我々が試練の時に旅を終え

ることを拒否し、引き返すことも、たじろぐこともなかったということを語り継がせようではないか。地平線に視線を定め、神の慈悲を身に浴びて、我々は自由という偉大な贈り物を運び、将来の世代に安全に送り届けたということを。ありがとう。神の祝福がみなさまにあらんことを。そして、神の祝福がアメリカ合衆国にあらんことを」と呼びかけて、演説を締めくくりました。

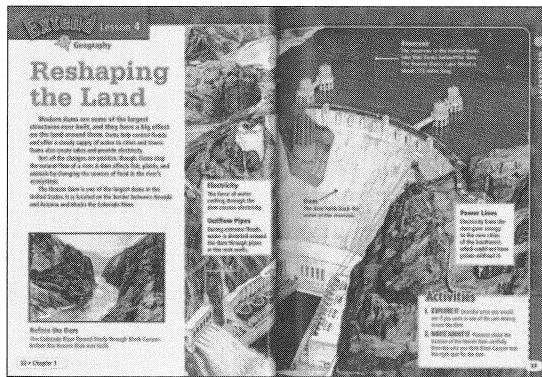
そこには、建国の理念やナショナル・アイデンティティと呼ばれるものが明確にありました。先人たちによる国土への働きかけと弛まぬ努力の上に、現在のよりよい暮らしや「自由」の理念があり、これらを将来世代に確実に引き継いでいかなければならぬという使命感がありました。過去と現在と未来をつなぐ壮大な物語がありました。

アメリカの教科書の特徴

アメリカの教科書は自由発行で、民間の教育出版社は、各州の教育スタンダードなどを参考にしながら教科書を編集しています。また、アメリカでは、学校が備品として教科書を保管し、児童生徒にこれを無償貸与するため、教科書は数年間の使用に耐え



アメリカと日本の教科書(小学5年生・社会)



フーバーダムの効用と環境への影響

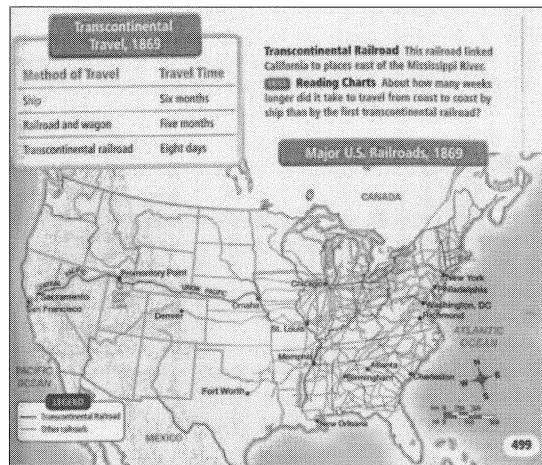
うるよう「百科事典」のような体裁をしています。アメリカの教科書には、①ハードカバーでサイズが「大きい」、②ページ数が多くてとにかく「重い」、③多色刷りの写真や図表などが活用され「ビジュアル」である、といった特徴があります。

合衆国史の第1の主題「国土・地理」

アメリカの大手教科書出版社(Houghton Mifflin Harcourt 社)が発行する小学5年生用の「合衆国史」教科書を読んで、日本の教科書との違いとしてまず気付くことは、歴史教科書の最初の学習テーマが「アメリカの国土(Land)」であることです。

教科書の1ページ目には、「この教科書では、合衆国に暮らす国民のことを学びます。この教科書を読んでいくうちに、アメリカ人にとって国土がいかに重要なものであったか、そして今も重要なものであるかがわかると思います。合衆国を理解するには、地理を習得しなければなりません」と記述されています。

また、第1章・Lesson4「人と国土(People and the Land)」では、高速道路建設やダム建設を取り上げ、その効用と環境・生態系への影響の両面について、しっかり考えさせる機会を与えています。例えば、発展学習のページ「国土の改良について(Reshaping the Land)」では、アリゾナ州とネバダ州の州境に位置するコロラド川に建設されたフーバーダムを取り上げ、洪水の制御、水や電力の供給、水辺の創出といったダム建設による効用を説明するとともに、動植物など生態系への影響につい



全米主要鉄道網(1869年)と大陸横断時間

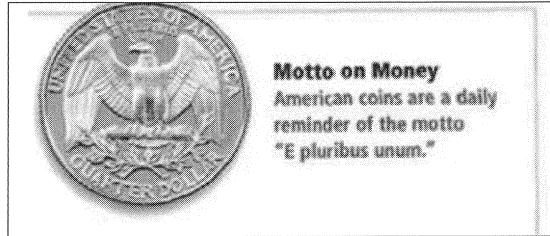
てコメントしています。

さらに、古代アメリカ先住民の時代(灌漑施設の整備)に始まり、植民地時代(河川水運と河口部築港)、独立革命から南北戦争の時代(国道や運河・大陸横断鉄道の建設)、20世紀から現在にかけて(大都市形成と都市インフラの整備、パナマ運河、テネシー川流域開発)と、生徒たちは合衆国史を通じて、国土とインフラ整備に関する知識を学んでいきます。

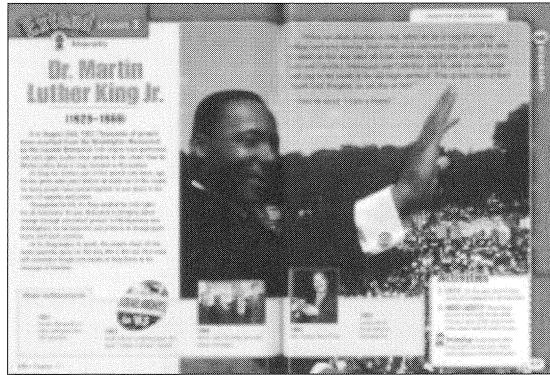
アメリカ人のDNAに刻まれた第2の主題「移住」

合衆国史教科書から読み取れる第2の主題は「移住(Migration)」です。氷河期にベーリング地峡を渡ってアメリカ大陸に移住してきた古代インディアンに始まり、入植・植民地時代(17~18世紀)はイギリス系・フランス系・オランダ系の移民とアフリカ系の奴隸、18世紀中頃からはドイツ系・アイルランド系の移民、その後第二次世界大戦まではイタリア系・ユダヤ系・スラブ系の移民、そして第二次世界大戦後はアジア系・ラテンアメリカ系の移民というように、アメリカ合衆国はいずれの時代も世界中から多くの移民を受け入れてきました。

そしてその移民たちは、アメリカという壮大な国土を自らの永住の地と定めるとともに、さらにより良い生活を目指して、西部へ、北部へと大陸を移動していました。オバマ大統領が就任演説や一般教書演説で毎回強調するように、アメリカ人は交通イ



硬貨に刻まれたモットー“E pluribus unum”



マーティン・ルーサー・キング・ジュニア

ンフラを重要視するDNAを持っているようです。

第3の主題「多様性」と「多数から一つへ」

第3の主題は「多様性(Diversity)」です。アメリカ合衆国は世界でも有数の多民族国家で、多様な宗教を抱えています。そしてこれら多民族・多宗教な集団こそが、現在のアメリカの文化的価値を創り出していました。教科書では、「民族と宗教の多様性は、合衆国最大の強みの一つである」と教えていました。

また、教科書ではこれに引き続き、“E pluribus unum”(多数から一つへ)という13文字からなるラテン語のモットー(標語)を紹介し、アメリカ合衆国という国家が、これまでにも増して多様化している中で(独立当時の13州から現在は50州)、この国のモットーは、益々“E pluribus unum”というものでなくてはならない、つまり人種・宗教・信条を超えて一つの国家としてまとまろう、と教えていました。

さらに、これまで社会の周縁に追いやられていたマイノリティや女性たちの社会的貢献を高く評価し、彼ら・彼女らの伝統文化を歴史の主流に位置付けています。

シティズンシップとデモクラシー

アメリカ社会が抱える問題(人種間の溝)は現在も解決されたとは言えませんが、公民権運動から1964年の公民権法成立に至る歴史、キング牧師の演説 “I Have a Dream(私には夢がある)” が、合衆国史の新しいページを切り拓いたことは確かです。

第4の主題「市民性」

そして、最後の主題が「市民性(Citizenship)」です。民主主義の原則や権利と責任について解説した後、「これからしっかりと学習することで、大人(18歳)になった時に良い投票が可能となり、結果、民主主義に貢献することも、合衆国をより良い国にすることもできるようになります」と結んでいます。フランスの政治思想家アレクシ・ド・トク维尔がアメリカの諸地方を見聞してまとめた『アメリカのデモクラシー』が、今も合衆国史教科書に生きています。

「合衆国史」教育の価値

オバマ大統領の就任演説は、われわれ日本人にとって、先達への畏敬の念や次世代への強い思いなどが込められた特別な演説のように聞こえ、一方でどちらかと言えばなじみにくい宗教的な演説であるようにも感じられました。しかし、アメリカ国民にとって、ごく自然な、そして合衆国大統領にふさわしい演説であったに違いありません。なぜなら、彼らにとってのオバマ大統領演説は、これまで学校で学習してきたこと、「合衆国史」の授業の延長で

あったからです。アメリカ人が学校で習う「合衆国史」は、単なる事件・出来事や英雄・偉人の歴史にとどまらず、全てのアメリカ国民の歴史として、自分の先祖や子孫の歴史として実感することができる内容となっているのです。

神の下なる一つの国家

また、日本人にはわかりにくい宗教的な部分、つまりアメリカは「神の下なる一つの国家」であるとする部分についても、学校の教科書でこそ明確に表現されませんが、彼の国では国民の共通認識の一つとなっています。アメリカ合衆国は歴史上、最初に国教制度を憲法によって否定し、信教の自由を保障した国、いわゆる政教分離国家ですが、彼の国における政教分離は「宗教と政治の分離(Separation of Religion and Politics)」ではなく

く、あくまでも「教会と国家(州)の分離(Separation of Church and State)」であって、政治を含む公的領域における宗教的次元は、入植・建国以来ずっと肯定的に扱われてきました。

「神の下なる一つの国家」という言葉は現在も色あせず健在で、公立学校に通う生徒達が朝の授業開始前に合衆国国旗に顔を向け、起立して暗誦する「国旗に対する忠誠の誓い」には、“one Nation under God”という言葉が含まれています。また、“E PLURIBUS UNUM”というモットーが書かれたアメリカ合衆国の硬貨の表側には “IN GOD WE TRUST”というもう一つのモットーが刻まれています。

【次回「アメリカの地理・歴史教科書から学ぶ②
－合衆国地理教科書に描かれている北米発展
の歴史－」につづく】